

書評

愉楽と警世の書

——山田俊雄著『日本のことばと古辞書』を読む

工藤力男

小路しょうじさんの謎が四十年ぶりに解けた

とばを心にとどめて、テレビジョンの時

——著者の《随想（退職に際しての口代劇で浪人風の男が江戸の「浮世小路」

演）（本書所載、二つめの口演）を成城

大学の大教室で拝聴して、わたしはそう

感じたのであった。

わたしが四年間を過ごした北陸の大学

の合唱団に、「小路」という氏の上級生

がいた。「小路」という文字列から「こ

うじ」という語形しか思い浮かべられな

かったわたしに、それはいかにも奇妙な

ことばに聞えた。が、深く追究すること

なく卒業した。凡愚の悲しさである。

著者は、御母堂がよく口にしたそのこ

の口演の前半である。わたしの上級生も、

御母堂の出身地らしい加賀大聖寺の人で

あった。この口演の後半、「ミーちゃん

ハーちゃん」の種姓を極める話も興味が

尽きない。ことばの謎を解いて自ら浸る

愉楽の世界に読者をみちびく。本書には

そのような文章が満ちている。

右の文章など六つの口演、歴史の雑誌

などに書いた八篇の文章、『荻生徂徠全集』月報の連載「漢文訓讀の入門」（一七）から成る。ここではその口演を中心に見てゆく。

文章は公刊順の排列で章立ても番号もない。ここではおおむね掲載順に取り上げる。文章の標題を二重の山型引用符で括ることがある。

* * *

「闇から牛」

——漢字とその訓についての話——

この諺の「闇」をいかに読むか、ヤ

ミ・クラヤミ・クラガリという漢字の訓

の問題、またその語を、暗・闇・暗闇・

その他のどの文字で書くかの問題を主に

扱う。古代から現代までの辞書・文献を

博搜しての論述は、垂涎措くあたわざる

筆の運びである。

著者の学術的な文章の特徴は、ことばが発する微細な信号を捉え、確かな用例によつて追究して日本語研究のさまざまな方法を試みることである。その過程で、多くのばあい従来の研究や辞書への批判を発して人を大いに刺戟する。警世の書でもある。

この口演では、初めに自身の研究方法について中谷宇吉郎の言を借りて述べる。

研究にはアマゾン型と警視庁型とがあるが、自身が四十年歩んで来た文字の歴史的研究はアマゾン型だという。アマゾン流域に立ち入る生物学者は、そこにどんな珍種があるか知らないばかりでなく、それが存在するか否かも知らない。だから方法は一つしかない、常に眼を見開いて注意深く探索することであると。

「闇」の字の読み方をめぐる論述の終わり近くで、その訓、オホツカナシ・クラシ・クラヤミ・クラガリ・ソラ・ソラ

ニ・ヤミを掲げる。そして、これらが訓としては漢和字典式の漢字彙に登録されていないこと、あるいは訓の年代性^{クロノロジ}が不明のままに記述されている奇怪さを述べる。著者も編者の一人である『大字典源』では、親字ごとに古訓欄を設けて時代別に掲出し、右に述べた缺点を解消させた。この辞書の快挙である。

因みに、『漢和辞典と国語辞典とのあはひ』で、「長恨歌」の一句「大液芙蓉

未央柳」の宮殿名「未央」に、日本では古来「ビヤウ」の発音を伝えてきたことを述べる。古語辞典には「びやう【未央】」の項目を立てているので一往の理會が得られる。近年の漢和辞典は古典漢語に限定せず日本製の漢字語も収めるのに、この「未央」については「ビヤウ」の読みに言及することがない、と不満を述べている。『大字典源』の「央」の項に慣用音「ヤウ」はなく、「未」字の項の

「未央」にも特に説明はない。

ある擬製漢字についての所感

——「裪」と「社杯」と——

著者自身、「封建時代の男性のスーツ」という「かみしも」を、日本人はいかなる漢字で書き表わしたか。この口演草稿のほかに『日本歴史』から載録した『「社杯」の話』を合わせ読むことが望ましい。

「上下」に始まって、合字「𠔁」になり、衣偏の「社杯」になり、さらに合字「裪」を生んだこと、新生の字が先行の字を駆逐したわけではないことなどが明らかにされる。そして、「裪」が文化年間には見えるのに、「裪」の用例を示さない近代の辞書への批判を述べる。また、それらの文字を通して、いわゆる「国字」成立の原理を洞察する。国字は会意によつて成るとするのが説文流の説明だ

が、この字にはそれが該当せず、類似する字形の「峠」が会意文字であるのとは異なるという。同感である。

余談ながら、わたしは教室で国字を抜くとき、「峠」のほかに「囃」^{はな}「壺」^{ます}「緘」^{おとし}などを挙げ、これらは声符と意符をもつ形声文字に対比して、説文流に言う「形訓文字」だと戯れることがある。因みにこれらは言語処理機にも登録されている文字である。

《「社杯」の話》には、一般に国語辞典が刊行時に近い現実の状況を忠実・精確に捉えていないこと、大槻文彦が「峠」の字に言及しながら、その根拠や用例・出典を示さないことを遺憾として、右にも引いた批判がなされる。

日本のことばと古辞書

東京天理ギャラーでの古辞書展観の際に行なった口演の草稿。これが本書の

標題になっているように、著者としては最も本格的な議論を展開したものである。日本語史を考える上で古辞書が果たす役割を、二つの話題によって語った興味溢れる一篇。

竹取物語の冒頭に「三寸ばかりなる人」と書かれたかぐや姫が月に帰ろうとする、姫を育てた翁が「なたねの大きなおはせしを」と言う。小さいことの表現として意味は変わらないが気になるということから話が始まる。類聚名義抄に「蕪青アラナ」「蕪青子ナタネ」、色葉字類抄に「芥子ナタネ 蕪青子同」とある。「芥子」の漢字音は「カイシ」であり、字類抄の別の箇所「辛菜カラシ芥子^{カイ}同用之……蕪青^{カフ}」とあり、廻って和名類聚抄「辛菜」の条に「加良之俗用芥子」とある。かくて辞書はことば自体の歴史性や社会性に立ち、伝統と規範が尊重された一面を照射するのだという。

「なたね」が「芥子」の文字列に対応したこと、「芥子」は呉音風にケシとも読まれ、日本人は小さいことをケシで譬喩してきたことを述べて竹取物語に戻る。平安時代のケシがカラシナノタネを指したことは明らかだが、現代の辞書ではタネの項目から「芥子」に直ちに到達することができない。そして、辞書が十分な解説を用意していないと、その関連はしばしば誤解を発生させることに気付かなければならない、と警告する。

いま一つは今昔物語集に見える二つの「草馬」の話。この説話集に校注を施したときの経験に基づく。江戸時代の考証学者が捨ておいたこの語、ある文庫本には「くさうま」と読んで「草刈の馬」の注があったという。著者自身、日本の古辞書では解けなかったが、漢和辞書では簡単に解けた。諸橋氏の『大漢和辞典』の「草馬」の項に「(一)牝馬。驃。(二)訓練

しない馬……とあったのだ。灯台もと暗し。「草馬」なら日本書紀にもあって、日本紀私記・釈日本紀が「女^メ字^ツ万」と訓じていることを述べ、古辞書における「驛」の例をいろいろ紹介する。

この二つの事例から、日本の古辞書の中身の大事な部分に伝承されている中国の辞書も同時に見なくてはならないこと、「草馬」を直ちにメムマに導いてくれないうように、日本における漢字表記の障壁を考えなくてはならない、というのが結論である。

国語辞典を読む

——和漢洋にわたる語について——

藝術、南北戦争、黄禍、勿忘草、聖をめぐって蘊蓄が傾けられる。

ヒポクラテスの言に始まるという
“Ars longa, vita brevis.”の解釈から語
り始め“ars (羅) または art (英) の翻

訳語としての「藝術」の受容と変遷史を粗描し、中国においても日本と同様の変化が生じているらしいことを述べ、両国間の干渉も考慮すべきことを提言する。

「南北戦争」の項は、併載された《漢和といふこと——「聖」の字などについて——》にも言及がある。米国の“the Civil War”がなぜ「南北戦争」と訳されたかとして、幕末・明治初期の日本人の記録の中に答えを探す。久米邦武は「市民戦争」とも書くが南北戦争の例が多く、新島襄らも南北戦争と書いている。ここで著者の疑問は新たな展開を逃げる、米国にも別の呼称があったのではないかと。確かに別の呼称もあつて南と北では異なつたこともあるのだが、事はさほど簡単ではないらしい。現代日本語の辞書が「シヴィル・ウォー」との関係に言及しないのは遺憾だという。

日清戦争後の流行語になつた「黄禍」

を、森鷗外の明治三十六年の講演に沿つて述べる。鷗外によると、「黄禍」はドイツ人 Samson Himmersjerna の造語“Die gelbe Gefahr”だという。しかるに日本の国語辞典の「黄禍」の項には英語からの訳語とするのが一般、しかもバク—ニンが初めて説き、ウイルヘルム二世の唱導で広まつたと書きながら、ドイツ語形の見えないのは不審だという。

次は、和語のようだがじつは“forget, forget”に由来する「勿忘草^{わすれなぐさ}」の、漢にわたる部分「勿忘」に着目した論。近年中国で刊行された日本語中の片仮名語の辞典に「フォーゲット・ミー・ノット」を「勿忘草／母忘草」などとしている。日本では明治以来、大半が「勿忘草^{わすれなぐさ}」である中であつて、落合直文「ことばの泉」に「なわすれぐさ」が見えるので、「なわすれ草」を「勿忘草」と書くのは、中国に早く「勿忘草」「母忘草」の先縦

があつた可能性を考えるべきだろう。洋語出身のものが漢を衣裳替えの場として、和の世界に入り易くなることも、その漢の世界が現実の中国のみならず、漢の教養を備えた日本人の世界でもあつたのだ、という。近代漢語の日中交渉の研究は近年急速に進展したが、「わすれなぐさ」のように和語の風貌を示す語は死角にあつたのではなからうか。

最後に「聖パウロ」などの「聖」について、従来の辞書は中国の用法に目をつむつて記述したり、「英語」の音訳として記述することが普通であつた。だが、中国清代の『聖經直解』に「聖路嘉」「聖若翰」などあるのを見ると、「聖……」が日本独特の用法と断ずるのは早計ではないかという。この項は、併載した『漢和といふこと——「聖」の字などについて——』の方が詳しい。わたしは軽率にも音訳説で納得していた者である。

最後に、和・漢・洋にわたる語は今後も殖えるだろうが、その漢を中国におけることとして除外しえず、擬似の漢も少なくないことに注意すべきだという発言がある。

本書の中で特に重要な提言の文章としてわたしは読んだ。

『兵員要語帖』といふ資料

内外の軍隊勤務に緊要な名称や用語を集め、同時に兵卒の習字の具に供せんとして陸軍が作った、明治十六年版と十七年版の資料の紹介である。

全体で二千百五十九字。漢字の音読、訓読、音訓雑様を区別せずに列挙した語彙集だという。句読点なしに聯想に基づいて二字語・三字語、それ以上のものが

ほぼ恣意的に掲げてある。掲出された二丁分の図版を見ると、資料としての扱いの困難さが予想できる。著者が誤読・錯

誤を免れないかと危惧するのもむべなるかな。そのような資料の一千余語を、著者は頭字の五十音順に排列しなおし、若干の感想を付している。

かかる資料に注目する理由の一つに、森鷗外が創めたと言られることのある「情報」の種姓さえ判然としていないことがあるという。その「情報」が、この資料に見えるのである。それは、便宜上「青」を音符とする「青・清・情」などの諸字と「セイ」の音にまとめて掲げてあるので、使用の際には注意が必要である。ついでに近代の国語辞書において、軍隊用語とおぼしいことばの出典の杜撰さを批判する。

* * *

以上、批評ならぬ感想を羅列した。それには訳がある。

わたしも日本語の歴史を心がけて研究者の末席をけがす者であるが、著者が近代語を主領域とするのに対して、わたしは古代語を主領域としており、ここに紹介したことはについて、ほとんど踏み込んで調べたり考えたりしたことがない。

しぜん、著者の方法に注目して発言するほかない。冴えない書評になる道理である。それでも執筆を引き受けたのは、編集委員会からの強い要望と、日來の学恩に報いたいという思いによるものである。著者から学んだことは数えきれないほど多く、計り知れないほど深い。特に、畏れに近い篤い敬意をもって学んだのは、用語に表記に妥協を許さぬ精確さ・厳密さであり、彫琢を極めた文章の典雅さである。よほど啓蒙的な書物は別にして著者とその姿勢を崩すことはない。本書の読者として想定されたのは、日本語・日本文学を学ぶ人、日本史の研究者、荻生徂

徠全集を読むなど漢字をする人ということになる。したがって、いわゆる正字体と歴史的仮名遣に拠ることは納得できる。そう思っただけでいくと、時々不審に思われることがある（以下、用例の所在ベリジを算用数字で括弧書きする）。

例えば、「中国」（二〇〇ほか）、「国語」

（二〇〇ほか）、「国字」（二〇〇ほか）。「外国」も多い。つまり引用や書名を除くと、おおむね「国」を用いているのである。また、書名は固有名に正字体と常用漢字体を書き分けて『広辞苑』（二〇〇ほか）、「日本国語大辞典」（二〇〇ほか）とし、『辞苑』（二一三ほか）、「辞源」（二一四ほか）、「大辞典」（二一四ほか）とし、地の文では「辞」を用いる。なぜか諸橋の辞典は『大漢和辞典』である（二〇〇ほか）。地の文には、まれに「釈一釋」「乱一亂」も見える。通常わたしの読書行為に字体の新旧はこだわることなく、相当に読み進んでそ

れが正字体で組まれていることに気付くこともある。今回、著者の用字法を知っているの、初めは気にならなかったが、文字や辞典を専ら対象として頻繁に出現するので目に付いたのである。本書には凡例様のものがなく、右の書き分けの根拠はついに判明しなかった。

本年度、わたしの担当授業「国文学基礎演習Ⅲ」の講義題目は「日本の言語政策」とし、講義要項の「内容」は「主に戦後日本の言語政策を通して、最も合理的・効果的な表記法は何かを考える。」としておいた。著者が戦後の言語政策、常用漢字・現代仮名遣・音訓表などに否定的であることは他の著作でも述べている。本書を歴史的仮名遣・正字体で書いたのも当然のことである。一方、本誌十五号の拙稿にも書いたように、わたしは敗戦後の国語政策を基本的に支持する。そのうえで、時代に即した表記法を採用

すべきだと考えるので、著者とはたちばが異なる。立脚点の相違をこのように認めたとうえで、なお疑問に思うことを二つだけ述べよう。

一つは付属的要素の漢字表記である。

例えば「その中に含み乍ら」(91)、「よめない乍らも」(106)、「生活をきりつめ乍ら」(108)などの「乍ら」であり、「軍隊中心主義と迄極言して」(123)の「迄」である。ともに漢字の意義を和風に少しずらして生まれた用法。漢文や古文獻に造詣の深い著者としては書きやすい文字であろうが、これらの使用によって文章が読みやすくなることも美しくなることもない、とわたしは思う。これらを漢字表記するなら、ほかに「試さ^れ被る」「書く可^べきだ」「無^いけれ^{ども}雖」「顧み^はれ者」などと書けそうである。かれを漢字で書き、これを漢字で書かない規準は何によるのだろうか。ついでに言うと、

「出来る」の表記には賛成できない。可能の意の動詞「できる」に出自を引きずる必要はもうないだろう。「来る」に「きる」の訓はないのだし。

残る一つは外来語を歴史的仮名遣で書くことである。そもそも異言語の音韻を日本語に写すこと自体が無理を承知するのだが、できるだけ近似の文字を選ぶ努力するのはやむなきことである。本書で特に翻訳語を扱った部分に用例が多い。

例えば北欧の国名が「スウエーデン」と書かれている。著者は読者にこの仮名書語を六拍で読むことを求めたのだろうか。そうではあるまい。本書を読むほどの人なら、これが *Suëden* だと知っていることを前提としているのだろうか。同じことは、「フィクシヨン」「シヴイルウォー」「チャールズ一世」にも言える。だが常に読者にそれが期待できるとは限らない。クワトルジュイエ(98)・キユ

リオシテイ(98)・デイライヴ(148)はどうだろうか。

そもそも片仮名は専ら日本語の音を写す文字として生まれと言える。そして期待にたがわず、漢字音、感動詞・擬声語等の表情音、外来語などの表記を受け持ってきた。これは先人たちのすばらしい智慧であつたとわたしは思う。ならば、その片仮名の表音性を最大限に生かした使い方をすべきではないか。

歴史的仮名遣は、平安初期の日本の和語・漢語を仮名表記するための原則、その対象にヨーロッパの言語は含まれない。だから、歴史的仮名遣ですべての外来語を書くことはできないはずである。歴史的仮名遣で書いた「アウグスチノ」(111)はオーグスチノと読むほかに道理になる。坪内逍遙が『小説神髓』で「羅^ママンス」と書いたのは理に合っている。平安初期に音韻としての長音はない

のだから、「ウオー」とも「チャールズ」とも書けないはずである。わたしが現代仮名遣をむげに否定しないわけはここにもある。

* * *

最後に、この機会に自分が抱える問題二つを記して著者のご教示を仰ぎたいと思う。

一つは、現代仮名遣で「もう」と書く副詞のこと。著者は「もう」(102 ほか)と書き、時には「も」(100)も用いる。その「もう」と書く根拠は何かという点とである。

古代の和語の語中末には音便によらない母音音節が存しないという原則に従うと、「もう」は中世以後に忽然と出現した語ということにならないだろうか。半世紀近い昔、著者も編纂に加わった『新

潮国語辞典現代語・古代語』の「もう」の項には、歴史的仮名遣を「まう」とする説がある、としている。その「まう」は、「いま」から語頭音が落ちた「ま」を長呼した語かと思われる。右の辞典にも、「ま」は「いま」の約か、とあった。ならば、『日葡辞書』の *Mōtaya*、『名語記』巻二の「イマハトイフヘキイヲイヒケチテマトハカリイヘル也」(43オ)

を傍証に、歴史的仮名遣で書くなら「まう」がふさわしいのではないか。現代語に残る「もはや」は「いまは早」の崩れたもので、世上によく見る「最早」は論外の当て字だ、わたしはそう考える。

わたしが著者に篤い尊敬を寄せるわけの一つが、その学問と実践が一体になっていることである。歴史的仮名遣と正字体の使用のほかに、精確・簡短・理會・編輯・位地・研討などの用字がある。出典の確かな語以外は用いない方針かと推

測する。《漢文訓讀の入門》を書く深い学殖に裏打ちされたこの厳格さが大きな魅力である。先に書いたようにわたしは戦後の国語政策を基本的に支持するが、理にはずれたことには断乎として従わない。けわい・藝術・缺席・排列・滲透などと書いて周辺の響きを買うゆえんである。

近年わたしは字訓の変遷に興味を抱き、昨年度は大学院で「字訓史の研究」を講じた。稲荷山古墳鉄剣銘に始まって古本節用集で終わってしまい、著者の大業「漢字の定訓についての試論」(『成城國文學論集』第四輯)に直接就くには至らなかった。近世に視点を移すと混沌とした光景が予測される。例えば「極」の訓「きまる」である。

著者は時にこれを用いる。本書でも振仮名した「お極り」(88)のほか、「身勝みかた手に極めてしまふのも」(126)はその他

動詞形かと思う。とまれ、「極」に「きまる／きめる」の訓を負わせることは、意味から推して有りえなくもなからうが、わたしにはあえてこの字を用いる必要性が理解できないのである。なお、『加川大字源』の「極」の項の和訓欄に「きまる・きめる」と用例「腕を極める」「月極めの読者」「本極り」を掲げて著者の用字法と歩調を合わせている。しかし、古訓欄に二十ほどの訓、人名欄に八つの訓があるが、「きまる」「きむる」は見えない。つまり、この訓の根拠をわたしは漢の側には求め得ないのである。著者はそれを何に見いだしているのだろうか。

(くどう・りきお 成城大学教授)

(四六判 二百二十二ページ 二千三年
五月二十日刊 三省堂 二千百円)